

推薦レポート

福田安典先生推薦

書き続ける人生の裏に——お路の『南総里見八犬伝』

小畑美咲

【はじめに】

『南総里見八犬伝』は滝沢馬琴による読本である。全部で九輯九十八巻一〇六冊に及ぶ大作である。文化十一年（一八一四）に第一輯が刊行され、天保十三年（一八四二）に最終回を迎えたこの作品は、ある女性がいなければ完結できなかった。その女性とは、馬琴の長男の嫁・お路である。

馬琴は晩年、視力をほぼ失っていた。それは一行に収める文字数の少なさと大きさが物語るほどである。そのような馬琴の目となり、手となったのがお路だった。『八犬伝』の第九輯巻四十六から、第七十七回以降は、お路の代筆となり、また日記や書状も代わって書いている。

本稿は、『南総里見八犬伝』の影の立役者であるお路について、ただの代筆を担っているだけの存在だったのか、その働きぶりや社会の様子から考察し、まとめたものである。以下は、『南総里見八犬伝』を『八犬伝』と略して記していく。

【お路という女性を見る】

まず、お路という女性について整理していきたい。

お路は、文化三年（一八〇六）に医者の子に生まれた。幼い頃から書を習い、舞の稽古をし、武家の奥向きに仕えた経験があるという。このことから、お路にはそれなりの教養が身につけていたことが分かるだろう。そして文政十年（一八二七）、二十二歳の時に馬琴の長男宗伯と結婚したが、滝沢家は非常に個性豊かな面々が揃っていた。一家を担う馬琴は、著名な戯作者であるものの、非常に気難しい性格だった。姑のお百は癩癩持ちで扱いにくく、夫である宗伯は身体が弱かった。天保六年（一八三五）には、夫と死別している。

【お路の働きぶりから】

次に、お路の働きぶりや字体について見ていきたい。

夫に先立たれたお路は、滝沢家の中心となって働いていく。宗伯の仕事を継ぎ、子どもや老父母の世話を行った。偏屈者の馬琴が日記に、「お路がいなくては滝沢家が存在しない」といって、その働きぶりを褒める

ほどであった。そしてお路は、晩年の馬琴の目となり手となるのである。先述したとおり、お路には字を書く素養があったはずだが、馬琴は彼女に字や言葉を教えていたという。馬琴が几帳面な偏屈者であるように、『八犬伝』には難しい文字や言葉が多い。代わりに『八犬伝』を記すにあたって、お路は非常に努力したのである。この努力に伴い、当初柔らかな字を書いていたお路だが、次第に馬琴のように男っぽい筆遣いへと変わっていく。その字は、馬琴が記したもののなか、お路が記したもののなか、見分けることが難しいほどである。授業内レジュメによると、

お路も初めは女性的なやさしい筆遣いであった。この手紙のはしほしにもそれがみうけられるが、馬琴の代筆であることを意識して、いじらしいまでに努力をしている。やがて馬琴の書に見まがうまでに成熟するが、お路の書は女筆ではなくなった。文面、筆跡ともに、お路はおのれを棄て、馬琴になり代わったのである。お路はそれほどに献身的であった。¹⁾

とあり、お路が献身的な思いから努力を重ね、馬琴の文字に近づけたのではないかという事だった。確かに、舅に対する価値観は、現在とは違うだろう。滝沢家に嫁いだのだから、実の父のように尽くすのだろう。しかし、ただ献身的な思いがあるだけで書き続けられるのだろうか。厳しい指導に涙を流しても、それでも書き続けられたのは何故か。

【お路を取り巻く状況から】

お路が自らの字体を変え、代筆や口述筆記を続けられた理由を考察するにあたり、今一度滝沢家や社会の状況を見直したい。

まず、滝沢家の事情である。お路が嫁いできた時の滝沢家を担っていたのは、夫の宗伯ではなく、馬琴であったという。さらに、体の弱い夫

亡き後、滝沢家の中心となったのはお路だった。つまり馬琴晩年の時には、馬琴を支えるお路こそが、滝沢家の担い手になっていったといえるだろう。また、お路が滝沢家に嫁ぐ数年前から『八犬伝』は刊行されている。結婚するにあたり、相手の家のことは多少なりとも知るはずだ。お路は『八犬伝』が滝沢家の軸となっていることを知ったうえで嫁いだのではないだろうか。また『八犬伝』を読んでいたとも考えられるだろう。これらのことから、お路にとつての『八犬伝』は、馬琴が視力を失ってから始まったものではなく、嫁ぐ前から始まっていたのではないだろうか。

同時に、世の中に作品を生み出す「作家」という職業に魅せられていたのではないかと考えられる。そもそも近世後期は、戯作を楽しむ女性読者が多かったという。それは、読み書きができる女性の増加に伴うことによる。永井悦子氏は

近世後期における読者層の拡大については、寛政の改革以降の出版界、つまり作品の送り手側における作者層や作品内容等の変化、また作品の受け手側である庶民層をとりまく経済的、文化的環境の変容といった種々の観点から論じられてきている。そうした読者層の拡大を促したであろうさまざまな要素のなかで見逃すことのできるものの一つに、庶民層における識字教育の普及が挙げられる。²⁾

と述べており、当時行われた識字教育が読者層を広げたことや、出版界に対して影響を与えていたことが分かるだろう。このことから、近世後期においては識字率の高さが読書の価値を高めていったと言えるのではないだろうか。読むことができなければただのモノになってしまう本だが、読むことができれば、本だけでなく、作者や出版する人々の価値も上がる。したがって、識字率が上がることで、「作家」という職業の地

位も向上したと考える。つまり、「作家」である義父の目となり手となるお路は、自らも価値のある職業に携わる者であると感じていたのではないだろうか。

このように、お路は『八犬伝』の口述筆記に対して、滝沢家を支える手段の側面と、世の中に作品を生み出す喜びという面から、書き続けることができたのではないだろうか。

【やぶにこーお路の覚悟】

以上を踏まえ、お路は馬琴の代わりという存在の域を越えているといえる。それは献身的な舅への思いだけに留まらず、自らの手を通して、作品が生み出されていることへの喜びがあつたと考える。もはや、二人三脚ではない。馬琴とお路、二人で一人なのである。厳しい舅の指導を乗り越えられたのも、お路自身が『八犬伝』の作者であるという認識があつたからであろう。

お路は安政五年（一八五八）、五十三歳で亡くなる。彼女は亡くなる四日前まで、自筆で日記を書き続けたという。死の直前まで、書き続けるお路からは滝沢家を担う者、そして大作を書く者としての覚悟が感じられるだろう。

【引用文献】

- (1) 二〇二一年一月十三日配布授業内レジュメ「舅の手となつて―滝沢 路―」
- (2) 永井悦子「近世後期女性読者の識字傾向に関する一考察」〔国文学研究 第一四五巻、二〇〇五年三月〕

【参考文献】

- ・滝沢馬琴「回外剩筆」〔南総里見八犬伝〕
- ・ジャパンナレッジ『日本人名大辞典』
- ・二〇二一年一月十三日配布授業内レジュメ前田諒子『近世女人の書』「舅の手となつて―滝沢 路―」〔淡交社、一九九五年〕
- ・二〇二一年一月十三日配布授業内レジュメお路自筆「原稿」と馬琴自筆「原稿」
- ・永井悦子「近世後期女性読者の識字傾向に関する一考察」〔国文学研究 第一四五巻、二〇〇五年三月〕
- ・柴田光彦「滝沢路女伝覚書抄」〔跡見学園女子大学一般教育紀要〕第五号、一九八九年三月